

平成21年4月30日現在

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2006～2009

課題番号：18251015

研究課題名（和文） トランスナショナリズムと「ストリート」現象の人類学的研究

研究課題名（英文） Anthropological Research on Transnationalism and 'Street' Phenomena

研究代表者

関根 康正（SEKINE YASUMASA）

日本女子大学・人間社会学部・教授

研究者番号：40108197

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：文化人類学

キーワード：文化人類学、民族学、文化研究、トランスナショナリズム、ストリート文化

### 1. 研究計画の概要

本研究の目的は、「下からの視点」と重なるヒューリスティック・アプローチを特徴とする人類学的方法・視座をもって、グローバル・フローの吹き荒れる現代の生活世界の現実に接近し、できるだけ正確に描写・分析することにある。その意味で、本研究は多くの研究が展開するトランスナショナリズム研究の一翼を担うものであるとしても、非定住的な「ストリート」現象に特に注目することが大きな特長である。

ここで「ストリート」という概念は、二つの意味を含意する。第一の意味では、まさに個々の実在の街路としてのストリートそのものをめぐる現象であり、第二の意味では、ヒト、モノ、コトバのグローバル化ないしトランスナショナル・フローという交通現象を「拡張したストリート」の次元をとらえる。ストリート性は、キーメタファーとして研究の中心軸なる。

従来の研究では看過されがちであった、グローバリゼーションによって活性化するローカリティ（「勝利するローカリティ」）ではなく、抑圧され駆逐される「敗北したローカリティ」の救出に明確に標準を定める。「下からのトランスナショナリズム」をさらに詳細に腑分けすることが生きられる現実分析には不可欠であるからである。

### 2. 研究の進捗状況

本研究での「ストリート現象」への注目の要点は、言語化され現代のディスクールに回収されるかたちで再生産される「勝利するローカリティ」を明らかにするに留まらず、さらにその蔭に隠されたここで「敗北したローカ

リティ」と呼ぶものを思考する場所として最適だからである。「ストリート現象」そのもの内に、その<中心>と<周辺>がある。それは「勝利するローカリティ」と「敗北したローカリティ」との区別の具体的事象とイメージを私たちに提供してくれる。

このような構想・目的と立場・方法をもった本研究は、多重の次元を内包した「ストリート現象」を、世界の多様な地域社会においてインテンシヴにフィールドワークする研究分担者および研究協力者の眼をもって具体的に詳細に記述していくことが、基本的な達成目標となる。これに関しては、「代表的な研究成果」欄の図書のところに記載されるように民博の研究報告書シリーズの総計1,000ページ迫る2書として刊行できるほど、この3年間の各自の海外調査で蓄積ができた。その目次を一目すれば、すでに大きな成果を上げていることが確認できる。

この点で本研究の基本的な目的は確実な達成を見ているが、さらに最後の一年もそれを拡充する調査を展開する。刊行された書籍に明らかなように、研究メンバーに共有された「下からの視点」をもって行われてきたが、それを深化させながら、最後の4年目は、そうした多様な新知見をもたらす詳細記述を土台にして「下からのトランスナショナリズム」のなかでも「敗北したローカリティ」をいかに描き出せるかという方法・理論的な展望をさらに考察していきたいと考えている。

### 3. 現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している。

その理由として、本研究は基礎データの蓄積とその一定の理論化を研究成果として示す

ことになったが、基礎データの蓄積という目的も理論化という目的もすでに8割がた達成されていると思われるからである。計画3年目で、この計画自体が、しっかりした民博での3年半の研究会の相互交流を踏まえていたこともあり、効率よく基礎データの蓄積が進んでいる。民博研究会の報告書でも科研の成果が取り込まれていることを特筆明記した。既述のように本研究にとっては、中間報告の位置を占める上記したSERの刊行は、本研究の高い達成度をすでに証明している。

当初予期され、すでに実証の段階に至っている研究成果のポイントは、トランスナショナリズム研究の立場が本来含意しているもっとも重要な核になる知見、すなわち世界をみる眼差しの移動・転換というものにリアリティが与えられつつある。移動性を定住の眼差しから異常事態として見るのではなく、その移動性そのものが実は私たちの生活世界のリアリティなのであることを自覚するような眼差しの転換が、既に現象においてすでに展開し、むしろ私たちの認識の方がむしろ追い付かないことが見えてきている。これまでのトランスナショナリズム研究の蓄積において、いまだこの核心的な知見はその課題設定の正しさに比して現実的な実証研究の蓄積は不十分であり、その欠を補うことも本研究は目指したが、豊かな形で大方達成されつつある。

#### 4. 今後の研究の推進方策

残り一年間になった本研究は、最後の年もメンバーによる海外学術調査をさらに拡充し基礎データに厚みを与えていく。前項に示したような視点の根本的転換の必要性を詳細な現実実践から学ぶことで得られる本研究の成果の意義は、ポストモダニティ段階の社会においてむしろ現出してきた「第一世界」の中での広義の意味のホームレス問題（定住者もまたホームレス化しているという理解）>という「第四世界」概念の提起した問題の正確な現実把握に寄与貢献する。この視点の転換をともなった現実把握の視野無しにして、近代社会の定住的な感覚や眼差しに留まっていたは、眼前で進行形の形で生起している現代社会の「異様に見える」諸問題は適切な対応の方途を見出せず、むしろ無用な偏見、誤解の中で事態が混乱し解決は遅延されていこう。したがって、本研究は、眼差しの転換の学としての人類学の特長を生かした社会への貢献を展望した基礎的研究であることを3年間の研究実践した今に、さらに確信を深めた。

その自覚、確信を基礎に、本研究が2009年度で終了するので、継続研究計画を2010年度に開始できる科学研究費補助金事業

として今年度後半には申請を予定している。ストリートの視点とトランスナショナリズムの動向は現代社会に貢献する人類学には不可避のジャンルであり、スタイルであるからである。もう一つは相似する観点を持っている海外研究者との研究交流を実施するための機会を、共同調査など組むことで新たな研究視野の拡充を意図しているのである。そのための手始めに2009年度にはドイツ人研究者でパリをフィールドにしているMonika Sultzbrunnを招請して東京のストリート性についての共同調査を関根や他のメンバーと行う予定である。

#### 5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計69件）

- ①小田亮「真正性の水準について」『思想』、査読無、1016号、2008年、297-316頁。
- ②松田素二「グローバル化時代の共同体の再想像に向けて」『哲学研究』査読有、第585号、2008年、1~35頁。
- ③小馬徹「宣伝広告から「国民文学」へ—ケニアの新混成言語シェン語の力」『歴史と民俗』査読有、25巻、2009年。

〔学会発表〕（計34件）

- ① Yasumasa SEKINE 「Toward an Anthropology of the Street : Street Phenomena in the Era of Reflexive Modernization」 at the V&A/RCA research seminar, 2/19, 2009 Royal College of Art and Victoria & Albert Museum, UK.

〔図書〕（計13件）

- ① 関根康正（編著）国立民族博物館『ストリートの人類学 上巻』SER 80 2009年、409頁。
- ② 関根康正（編著）国立民族博物館『ストリートの人類学 下巻』SER 81 2009年、561頁。
- ③ 近森高明、世界思想社『ベンヤミンの迷宮都市：都市のモダニティと陶醉経験』、2007、275頁。
- ④ 阿倍年晴・小田亮・近藤英俊（編）風響社『呪術化するモダニティ：現代アフリカの宗教的实践から』、2007年、404頁。

〔その他〕

ホームページ

<http://www.transnationalstreet.jp/>